



卓 話



「留学して」

ロータリー国際親善奨学生

猪又 玲子氏

2004年秋から約2年に渡り、東京四谷ロータリークラブからロータリー国際親善奨学生としてアメリカのニューヨーク州Buffaloに留学させていただきました。帰国したのが5月末ですから、そろそろ4ヶ月が経とうとしています。毎日色々な用事をしているうちにすっかり日本の生活に慣れ、今こうして留学生生活を思い出すとまるで遠い夢のようにさえ思われます。しかしながら、アメリカでの細かな生活の記憶が薄れていくことと反比例して、留学生活で出会った人達との絆が自分の中で一種の心の拠り所になっていると感じています。



私が留学したBuffaloは100年ほど前までは重工業で栄えた街ですが、今は主たる産業はなく前途ある町というよりは定年退職後の人達が多く住む郊外でした。ナイアガラの滝が近く、車で30分ほどで滝に着きます。最も近い都市はカナダのトロントで2時間ほどかかります。マンハッタンへ車で8時間ですから、遊びに行くとなるとアメリカよりもカナダ側へ行く人が多くいました。

私が勉強したのはState University of New York at Buffalo (ニューヨーク州立大学バッファロー校) という大学で俗にUniversity at Buffalo(略してUB)と呼ばれています。この大学はもともと1846年に私立の医学系大学としてスタートし、約50年前にニューヨーク州立大学の傘下に入って公立大学となりました。ニューヨーク州立大学のセンターは他にAlbany, Stony Brook, Binghamtonなどにあります。その中でもBuffalo校は最大の研究型総合大学でした。専門プログラムは300を超え、生徒数は学部課程が18,000人、大学院に1万人います。そのうち留学生は4,000人にのぼり、アメリカの中で11番目に留学生を多く受け入れている大学です。一番多いのはインド人でその次に韓国人が多く、日本人は200人程度で

した。

留学前には日本人は同国人同士でかたまりやすい、と聞いていましたが私の周辺にはあまりそういう人はいませんでした。提携大学間の交換留学生を除けば日本人留学生は大学院生が多く、自分の勉強に注力せざるを得ない関係からか日本人で集まって食事をする機会などは殆どありませんでした。むしろ渡米した頃は日本人同士敬遠するような雰囲気さえ感じられました。それに引き換え韓国人や台湾人、中国人はとても結束が強く、キャンパス内でもこれらのグループの人達が集っている姿をよく見かけました。日本で海外へ留学する人がふえ、留学しても日本語しか使わないケースが取沙汰されて随分経ちますが、そろそろその傾向の過渡期に差し掛かっているような気がしました。反対にかつて日本人留学生内で問題となっていたことが韓国や台湾で起きている印象を持ちました。

今振り返ってみても留学した一年目はとにかく授業についていくことや生活に慣れることで必死でした。二年目に入って言語・習慣にも徐々に慣れ、学外のアパートに移り住み自分の車を持った頃から自然体で生活できるようになりました。生活も大学中心だったものから少し学外へ移り、この頃に関わりあった人達がこの留学生活でもっとも忘れられない人間関係をもたらしてくれました。授業でのみ顔を合わせていたクラスメイトと出掛ける機会が増えダウンタウンへ繰り出し、勉強以外のつながりが深まりました。週末に始めた日本語補習校では、小さな生徒達に教師としての難しさや面白さを教えてもらいました。そして、お年寄りのデイケアセンターで知り合ったご夫妻には実娘のように可愛がっていただきました。また台湾人のルームメイトとは同居人を超えて、肝胆相照らして語り合える親友になりました。これらの人々とは留学を終えた今も変わらず連絡を取り合っており、忙しい日本の生活での愚痴や悩みを彼女達に話しては励まされています。

留学生活で良かったことをあげればとても数え切れない気がしますし、反対に本当に自分の身についたことをあげれば自信の無さに答えに窮するようにも思います。けれども、私にとっては留学生活の1年9ヶ月を通じて培った人間関係こそ何者にも代えがたい宝であったと思います。

派遣一年前の応募から始まり、ロータリークラブの方達には本当にお世話になりました。経済的なことに限らず、受け入れ先、また派遣元のロータリークラブの方々にはひとしおの支援をいただきました。ホスト先のロータリアン

には空港の出迎えから始まり、新居への引越しや生活に慣れるまで車を出していただきました。また、派遣元の東京四谷ロータリークラブの富田さんはいつも私のことをお心にかけてくださり、日本語の読み物を送ってくださったり、東京四谷クラブの様子などをいつも教えて下さいました。本当に悲しいことは昨年3月に富田さんが急逝されたことです。最後にお目にかかった折のお元気な姿が未だに忘れられず、信じられない思いです。きちんと自分の口から帰国のご報告が出来ないことが残念でなりません。

奨学生に選ばれた時から「なぜ私なのか？」と自信なく感じることもありましたが、今から思うと「なぜ」という理由は自分自身で立証するものであったと思います。ロータリークラブの機関紙に載せられるような華々しい活動は出来ませんでしたが、自分なりに出来ることを精一杯に行った自負があります。肩に力が入すぎた時もありましたが、難しく聞こえる“国際

交流”とは結局のところ人と人とのつながりであり、違う相手にどこまで興味を持って接せられるか、また、相手に私の人となりを知ってもらい、私の考えや育ってきた環境・文化を知りたいと思ってもらえるかなのではないかと感じました。そういう意味で、私が交流した方々が私に好意を持ってくださり、日本という国に興味を持ってくださったことが私がこの1年9ヶ月でアメリカに残した何よりの足跡ではなかったかと思っています。

最後になりましたが、この機会を与えてくださった東京四谷ロータリークラブの皆様、新天地で手を差し伸べてくださったTonawanda Rotary Clubの方達、素晴らしい制度を創設し維持して下さいているロータリークラブ、並びに弛まず支援して下さっている世界中のロータリアンの方達皆様に心から御礼申し上げます。ありがとうございました。